

## U.S.A.

### プロビデンス&ニューヨーク

一左脳のMBAから右脳のMFAの時代へ

アメリカ東海岸の6月初旬は新緑とコメントで輝いていた。ロードアイランド州都プロビデンス市にあるRhode Island School of Design (RISDリズディと呼ぶ)の卒業式に招待された。130年の歴史を持つアメリカの名門美術大学でイェール、アート・インスティテュートオブシカゴとMFA (Master of Fine Arts) ランキングで首位を競う、「美大のハーバード」である。私にはもう一つの関心が有った。ダニエル・ピンクの著書『A WHOLE NEW MIND』(邦題:ハイ・コンセプト:三笠書房)の中に“MFA is the new MBA”の表現がありその代表例のトップにこのRISDが紹介されているからである。

ニューヨークのペンステーションからアムトラックで3時間。20数年前はアメリカの駅といえば3Kの代表であったが、その当時でもプロビデンス駅には清潔で安全な古き良きアメリカが在った。小高い丘の駅の表に出るとキャピトルと閑静な市街と運河が見渡せる。坂の多い街である。緑樹の中に古い木造住宅が続き、煉瓦作りの校舎へと続く。姉妹校であるブラウン大学とは殆ど境界が無く、アーティストのRISD学生とアイヴィーリーグのブラウン大生が混交し独特の青春の香りを醸し出している。

卒業式はリバーサイドの“ホコテン”(歩行者天国)で行われた。世界中から関係者が集う。トイレ車も数台駐車している。MasterとBachelor合わせて650人が順番に登壇し学



RISD卒業式



RISD構内

長から卒業証書を受け取る。黒いガウンにキャップを着用するが流石に美大生らしく凝った飾付をしている。民族衣装や着物の姿も見える。卒業生が壇上に登るや父兄や親戚、下級生から一斉にピーピーキャーキャー口笛と掛け声がかかる。式典は半日以上続き、キャップ・トスで“中開き”となり、用意されたテントの周りでビールと軽食のパーティーとなる。

式典で“時の人”次期学長のジョン・前田(アメリカ人には発音し難いのか新聞ではMY - ay - dahと発音すると書いてある)が登場した。アメリカ人としては小柄で精悍な顔つきの42歳の日系アメリカ人は直前学長から紹介され、ただ一言“Hi, guys”と挨拶した。如何にも彼らしいデビューである。2008年6月1日付のProvidence Sunday Journal紙のトップに“RISD's rock star”の見出しの紹介記事がある。彼はシアトルのチャイナタウンでの両親の豆腐ビジネスで1日24時間、1年365日働くこと(勿論スポーツや部活の時間は無い)を経験しHard work is hard work, nothing romanticであるが、手で何かを作ることに喜びがあると学ぶ。MITでのコンピュータエンジニアリング学士と修士の後、96年に筑波大の芸術研究院でPh. D、アリゾナ州立大でMBAとなる。民間企業の仕事も数多こなし、MITのシンクタンクであるメディアラボで教鞭をとる。著書『The Laws of Simplicity』が14言語に翻訳されるベストセラーになり欧米での個展と受賞が続く。今や彼は“digital-age design guru”であり“21st-century Renaissance man”と呼ばれる。日本でもグラフィックデザイナーやコンピュータサイエンティストを超えるアーティストとしてカリスマ的存在である。資生

堂の花火カレンダーが彼の作品と知っている人は多い。

その彼を全米の最高峰美大のRISDが何故学長に迎えたのか? 大学関係者はcommunication & multitasking skillが時代の急務であると言ひ、ウェブデザインの新規学部導入か? との見方もある。同大の歴史には彼より若くして学長を務めた者、テキスタイル・デザインやアーキテクチャーという新規分野を正面に押し出した功労者もいる、また現職の画家が学長だったケースもある。沢山の期待と思惑と嫉妬と羨望が渦巻いていることだろう。彼にはこれ等に超然として、自分の“したい事”からは決してぶれない姿勢を感じる。ジョギングで鍛えた鋼の様な肉体と鋭利な頭脳を“自信のなさこそオープン・マインドの母”“安住の地が無いことが青春”“藩に属さぬ自立した浪人”等の彼一流の表現が包む。“若者が未来へ向かう時に必要とするもの”を用意できる人だと思った。

マスター修得メンバーの作品展覧会がプロビデンスのコンベンション・センターで開かれ、ニューヨークのレキシントンアベニューのNYデザイン・センターでは特にテキスタイル・デザインの展示会が開催された。多くの卒業生、産業人、アーティストがワインとスナックで談笑し商談や就職の話が飛び交ひ、履歴書やポートフォリオが求められている。夜は夜で三々五々レストランやパブへ繰り出すこととなる。我々は数人の若者達とプロビデンスではシーフードを、ニューヨークではしゃぶしゃぶで会食した。卒業生とその友人達は企業や、他大学の他学科や、教師をしてから等々、色々のキャリアを重ねてマスターに來た人達であるRISD。後ハーバードでマスターを修めた者もいる。異口同音にメジャーという壁をどうして作るのだろう、自分のドメインを確立した者が周辺や対極に興味を抱くのは当然の事で自由に出入りしていいはずだ、やりたい事に時間と領域は邪魔しないはずだ、と言う。これこそジョン・前田の思想ではないか。“ジョン・前田は文章が書けることをデザイナーの大切な要件としているがその延長線上にマーケティングも入るのだろう。”“文章力も大切だが絵を描けること、コンテで説明出来ることは人を更に納得させ

※記事等は、「社」日本マーケティング協会の許諾を得て転載しております。著作権は「社」日本マーケティング協会に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りいたします。



ジョン前田RISD新学長(向って左)

信頼させる”“「エンジニアにアートを学ばせるよりアーティストにエンジニアリングを」は「MBAにアートを学ばせるよりアーティストにMBAを」の時代”“理工系や医学系や芸術系にも経営学やマーケティングを学びたい者がいる。語学やコンピュータ同様マーケティングやマネジメント手法をアーティストのツールとして欲しいと思うようになる。”それは産業・金融インフラや法体系そして政治メカニズムを此の世のデザインとして「手で作ってコンテで表現する」ということか? “エンジニアリングを駆使して得られる知識と様々な体験と自由な直感力を基に発揮能力をエンジンとして皆で50年後をデザインしてみたい”

50年後のデザインはビジネス界で現実に必要とされているのか? 5カ年計画さえ疑問視する、否、必要すら認めない経営者の言を私は聞いてきた。然し存在するのである。福井威夫ホンダ社長が述べている(読売ウィークリー2008年6月15日号大塚英樹の注目トップインタビュー⑥)「最長50年先を見通します。地球規模の変化、地球環境の変動、社会の変動、人の気持ちの変化といったテーマについて50年先まで視野に入れます。」と。50年先を展望する右脳の産業人、行政人、立法者、リサーチャーが出てくるだろう。ジョン・前田をリーダーに右脳のMFAの若者達も怒涛となって疾走する。当然彼等は未だ若い。だからこそ彼は彼等の“やりたい事”をスケールアップしスピードアップするのに手を差延べることだろう。これはマギル大のヘンリー・ミンツバーグ教授がその著書『MBAが会社を滅ぼす』で警鐘する事への一つの解答と言えそうだ。